

大学生における自傷行為の有無による死への態度と 時間的展望の関連

西澤, 朋輝
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/7347410>

出版情報 : 九州大学総合臨床心理研究. 16, pp.39-45, 2025-03-14. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

大学生における自傷行為の有無による死への態度と時間的展望の関連

西澤朋輝 九州大学大学院人間環境学府

要約

本研究では、青年期における時間的展望と死への態度が自傷行為の未経験群、経験群、継続群と関連があるかを検討した。1 要因の分散分析の結果、死生観において死に対する恐怖において未経験群と自傷経験群が自傷継続群に比べ死に対して恐怖心を強く持っていること、生を全うさせる意思においては未経験群、自傷経験群、自傷継続群の順に生を全うさせる意思が強いことが示された。そして、死後の生活の存在への信念において未経験群が自傷経験群と自傷継続群に比べ死後の生活を信じているという結果が示された。時間的展望においては、未経験群が自傷経験群より時間的展望が高いことが示された。それに加えて、時間的展望の下位尺度である希望において未経験群の方が自傷経験群より希望感が高いことが示され、過去受容においては未経験群の方が自傷経験群、自傷継続群より過去受容が高いことが示された。以上より、自傷行為によって時間的展望、死への態度共に異なる概念を持っていることが分かった。

キーワード：自傷行為、時間的展望、死への態度

I 問題と目的

1. 大学生の持つ死へのイメージ

大学生の死生観について調査を行った與古田ら（1999）は死のイメージ因子を「こわい・苦しい・暗い」「悲しい・つらい」「美しい・安らか」「敗北・寂しい」といった4つの因子に分類している。與古田ら（1999）は、死生観の発達変化に関して初めて死を意識した時期も調査しており、約半数以上が中学生になる前までには死を意識したことがあると報告している。また、人間は9歳以上になると大人と同じように死とは自然法則により生起するものであると理解しているという調査結果もある（仲村, 1994）。仲村（1994）は、死の概念形成は年齢によって変化があり、仲村（1994）は生と死が未分化な第1年齢段階（3–5歳）、死の意味が分かっていない第2年齢段階（6–8歳）、死の現実的な意味を理解する第3年齢段階（9–11歳）、生まれ変わりの思想が増加する第4年齢段階（12–13歳）の4段階で変化すると述べている。生まれ変わり思想は海外の事例では少なく、日本独自の文化的影響だと考えられている。生まれ変わり思想が多い原因として、仲村（1994）は仏教的思想を上げるとともに、書物やテレビなどのマスメディアが報道するニセモノの（バーチャルな）死の要因も挙げている。

2. 希死念慮と自傷行為

影山（2003）は、現在の若者が有する生まれ変わり思想が社会の閉塞感や人生の閉塞感と短絡的に結びつくことで、ストレスが希死念慮を経て自殺企図に至るまでの過程が加速することを指摘している。実際に、厚生労働省による学生・生徒等の自殺の報告では、10–30代の死因の第一位は男女ともに自殺であり、平成19年から令和3年まで「大学生」が最も多く、次いで「高校生」が多いと報告されている（厚生労働省, 2022）。特に15–29歳までの階級においては自殺の割合が全死亡の50%以上を占めており、日本の自殺問題と世界の自殺問題を比べると、先進国（G7）において10–29歳の死因の第一位が自殺となっている国は日本のみであった。張（2015）は自殺を行うためには「自殺する能力」が身につけていないと自殺は出来ないと考えを示している。つまり、自殺する人とそうでない人を分かつ重要なポイントはJoiner（2009）の考えた「身についた自殺潜在能力」であると述べている。「身についた自殺潜在能力」とは、自ら命を絶つという大変な行動を決行する能力のことで、

自傷・自殺未遂や暴力を含め、さまざまな程度の恐怖や疼痛を伴う体験を繰り返すことで身につくとJoinerらは考えている（Joiner, 2009）。Joiner（2009）の考えたさまざまな程度の恐怖や疼痛を伴う体験において自傷行為と死生観の関連を調査した赤澤ら（2011）の報告では、自傷行為経験者の6割強に自殺念慮、2割強に自殺企図の経験が確認された。これに加えて、自殺を真剣に考えたことのある大学生は死を肯定的に捉える傾向が高く、逆に死への抵抗感は低い傾向にあることが示されている。更に、自殺関連行動の経験がある学生は、死に対する関心が高く、死に対して親和的であること、人生における目的意識が低いことが示された（與古田ら, 1999；赤澤, 2009）。同様に、自傷行為と死生観の関連においては、死への恐怖・不安、人生における目的意識、死への関心が自傷行為の経験と関連する要素であることが示され、死への恐怖・不安は薄く、人生における目的意識も低く、死への関心は高いことが示されている（赤澤ら, 2011）。このことから、自殺関連行動と自傷行為の経験における死への態度は類似した点が多いと考えられる。

3. 時間的展望

自殺念慮や自傷行為と死の軽視や死への抵抗感の低下の関連が示されている一方で、死について考えることは時間的態度を肯定的にすることが報告されている。時間的態度とは、希望・目標指向性・充実感・過去受容の4つの側面からなる感情評価のことである時間的展望の下位概念の一つであり、時間的展望と同様に過去、現在、未来に対する感情を評価する態度である（石井, 2013；日潟・齋藤, 2007）。時間的態度が肯定的である青年期の高校生、大学生は精神的健康度が高いことが示されている（石井, 2013；日潟・齋藤, 2007）。時間的展望の一側面である時間イメージと自傷行為の関連を調べた今井・福井（2021）は、良い時間イメージは自己否定感を緩和し自傷行為を抑制すること、過去イメージは自傷行為を直接的に抑制することを示した。そのため、死について考えることが時間的態度に肯定的な変化をもたらすのであれば、死について考えることは、精神的健康にとって、ネガティブなことばかりでなく、ポジティブな効果を持つ可能性も想定することができる。

以上の先行研究から、希死念慮や自殺企図が高い又は、自傷行為を経験したことがある青年期の学生は死に対して肯定的かつ親和的であることが示唆されている。それに加えて、先行研

究（石井, 2013; 今井・福井, 2021）から過去, 現在, 未来といった時間的展望も自傷行為と関連する要素であると考えられる。しかしながら, これまでの自傷行為と死への態度の関連の研究では, 自傷未経験者と自傷経験者の死への態度の違いは調査されているが自傷経験者と自傷継続者の死への態度の違いは調査されていない。そして, 自傷行為経験者の死への態度と時間的展望を同時に調査した研究は見られないため, 本研究において自傷行為経験者又は, 自傷行為を継続している青年期の学生の時間的展望と死への態度の関連を明らかにすることで, 自傷行為経験者の死への態度に対する理解を深め, 新たな介入を示唆出来ると考えられる。

4. 目的

以上より, 本研究では自傷行為を経験したことがない人（以下, 未経験群）, 自傷行為を経験したことがあるが今はしていない人（以下, 自傷経験群）, 現在も自傷行為をしている人（以下, 自傷継続群）の死への態度及び時間的展望の差異を検討することを目的とする。自傷行為においては, 有症率と男女差も調査するものとする。加えて, 石井（2013）, 赤澤ら（2011）の調査結果を参考に構想した以下の仮説をもとに検証を行うものとする。

- 仮説① 自傷継続群は死に対する恐怖が自傷経験群, 未経験群と比べ低い。
- 仮説② 自傷継続群は目的指向性及び希望が自傷経験群, 未経験群と比べ低い。
- 仮説③ 自傷継続群は過去受容が自傷経験群, 未経験群と比べ低い。

II 方法

1. 調査対象者

関東の私立大学1校に在籍する大学生を研究対象とし, 質問紙での調査を実施した。研究対象者は大学が開講している心理学講義の前後で質問紙の配布を行い, 質問紙に記載したQRコードからオンラインアンケートツールである Qualtrics に誘導し回答を求めた。研究協力を依頼した230名のうち未記入のあった回答を除いた有効回答209名（男性53名, 女性153名, ノンバイナリー3名, 無回答1名, 平均年齢19.71歳 SD=1.15）を分析対象とした。

2. 質問紙の項目

- 1) **デモグラフィック項目**: 性別と年齢について回答を求めた。
- 2) **死への態度**: 死に対する態度尺度（丹下ら, 2013）を使用する。5件法を用いた38項目の尺度であった。下位尺度としては存在の消滅や死の未知性, 未完の終結などへの恐怖を表す「死に対する恐怖尺度」, 自殺の否定および状況は問わず「生」自体が目的である「生を全うさせる意思尺度」, 死が人生に肯定的な作用を持つことを表す「人生に対して死がもつ意味尺度」, 死を他人事や苦難からの解放とみなす「死の軽視尺度」, 霊魂永続性を信じる「死後の生活の存在への信念尺度」, 身体の生より心の死を重視する「身体と精神の死尺度」の6下位尺度からなる。
- 3) **自傷行為**: 内容, 項目数ともに侵襲性について考慮された佐野（2016）の9項目からなる自傷行為尺度を用いた。「1. 全く当てはまらない」, 「2. 当てはまらない」, 「3. どちらでもない」, 「4. 当てはまる」, 「5. すごく当てはまる」の5件法で構成されている。自傷行為を評価するためのカットオフ値が

設定されており, 25点以上で自傷経験群, 31点以上なら現在自傷継続群と分けることが可能である。又, 問8の質問項目では「リストカットなどの体を傷つけることをしたことがある」（過去の自傷行為）, 問9の質問項目では「現在, 自分を傷つけることをしている」（現在の自傷行為）といった質問項目を用いている。そのため, 合計点のカットオフ値を用いて鑑別を行う以外にも, 問8の質問項目又は, 問9の質問項目に対して「4. 当てはまる」ないし「5. すごく当てはまる」と回答した回答者に対しても自傷経験ありもしくは, 自傷継続の疑いがあると考えることが妥当であるとされる。本研究では, 佐野（2016）のカットオフ値を基に群分けを行い, 過去の自傷経験を問う問8と現在の自傷経験を問う問9は群分けには用いないものとした。

4) **時間的展望の測定**: 白井（1994）の時間的展望体験尺度を使用した。5件法を用いた18項目の尺度であり, 「過去受容」（4項目）, 「現在充実」（5項目）, 「目標指向性」（5項目）, 「希望」（4項目）の4下位尺度からなる。「とても当てはまる」（5点）から「全く当てはまらない」（1点）とし, 得点が高いほど肯定的な時間的展望があることを示す。

3. 倫理的配慮

本調査では, 自傷行為尺度の中に直接自傷行為を尋ねる項目があるため, 質問紙を配布する前に, 本研究の目的と方法を記載した文書を用いて対面で説明を行い, 同意を得られた方のみ回答を募集した。Web 調査サイトの最初のページに研究目的や倫理的事項（研究協力は自由意思に基づくこと, 研究に協力しなくても不利益は生じないこと, 本調査は無記名で行うこと等）を記載した。また, 一度参加すると決めた場合であっても, いつでも参加を取りやめることが出来ることを伝え, 回答の最中に体調が悪くなった場合は即刻回答を中断してもらうように伝えた。その上で, 調査に参加してもらえ方のみ Web サイトの同意欄にチェックを入れ回答してもらうよう説明した。

4. 分析方法

統計解析には, Excel のフリー統計ソフト「HAD (ver18)」を使用した（清水, 2016）。未経験群, 自傷経験群, 自傷継続群の3群に分けた自傷群と時間的展望総合点, 時間的展望の下位尺度, 死への態度の下位尺度についてそれぞれ1要因の分散分析を行い両側検定で5%の水準を有意とした。

III 結果

1. 記述統計

先行研究の尺度構成に従い, 時間的展望体験尺度（白井, 1997）の各項目の得点を合計し, その合計得点の平均値を各下位尺度とした。更に, 時間的展望の指標として過去・現在・未来を合わせた全体的な尺度得点の平均値を時間的展望尺度の総得点とした。総得点と下位尺度得点の平均値および標準偏差を表1に, 時間的展望尺度と死への態度の相関を表2に示した。

2. 信頼性分析

時間的展望尺度の総得点とその下位尺度それぞれの内的整合性を検討するため, Cronbach の α 係数を算出した。その結果, 時間的展望尺度においては $\alpha=.71$, 希望では $\alpha=.75$, 過去受容については $\alpha=.83$, 目的指向性については $\alpha=.83$, 現在の充実については $\alpha=.81$ となった。各下位尺度において十分な内的整合性が得られているため, 以下では4つの下位尺度を分析対象とした。

表1 各自傷群における時間的展望尺度の平均値及び標準偏差

	未経験群 (n=147)		自傷経験群 (n=39)		自傷継続群 (n=23)	
	M	SD	M	SD	M	SD
目的指向性	2.75	0.08	2.74	0.16	2.91	0.21
希望	3.27	0.08	2.92	0.16	2.82	0.20
現在の充実	3.43	0.07	3.05	0.13	3.41	0.17
過去受容	3.40	0.08	2.86	0.15	2.88	0.20
時間的展望尺度	57.58	1.01	52.05	1.96	54.39	2.55

** p < .01, * p < .05

表2 時間的展望尺度と死への態度の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 現在の充実	—										
2. 目的指向性	.22 **	—									
3. 過去受容	.44 **	.15 *	—								
4. 希望	.48 **	.57 **	.42 **	—							
5. 時間的展望	.72 **	.70 **	.66 **	.84 **	—						
6. 死に対する恐怖	-.03	.00	.01	.18 **	.05	—					
7. 生を全うさせる意思	.34 **	.15 *	.33 **	.45 **	.42 **	.51 **	—				
8. 人生に対して死が持つ意味	-.04	.07	-.04	.13 +	.04	.16 *	.20 **	—			
9. 死の軽視	.14 *	.03	.10	.10	.12 +	.09	.14 *	-.12 +	—		
10. 死後の世界の存在への信念	.22 **	.07	.16 *	.15 *	.20 **	.22 **	.35 **	-.10	.74 **	—	
11. 身体と精神の死	.07	-.04	.03	.00	.02	-.04	.01	.25 **	.46 **	.37 **	—

3. 自傷行為における群分け

自傷経験群 自傷経験群となるカットオフ値の25点以上の割合は、全体の30%である62名であった。また、カットオフ値の25点以上の男女の割合は男性16名（8%）、女性42名（20%）、無回答4名（2%）であった。カイ二乗検定を用いて男女別自傷経験群を比較したところ、統計的な有意差は認められなかった ($\chi^2(3) = 9.87, p = .22$)。

自傷継続群 自傷継続群となるカットオフ値の31点以上の割合は、全体の11%である23名であった。また、男女の割合は、男性6名（3%）、女性15名（7%）、無回答2名（1%）であった。

過去の自傷に関して、問8の「過去の自傷について」の質問に4点ないし5点と回答した人の割合は、全体の13%である29名であった。また、男女の割合は、男性7名（3%）、女性20名（10%）、無回答3名（1%）であった。カイ二乗検定を用いて男女別の「過去の自傷」を比較したところ、有意差は見られなかった ($\chi^2(3) = 7.25, n.s.$)。

現在の自傷に関して、問8の質問に4点ないし5点と回答し、かつ、問9の「現在の自傷について」の質問に4点ないし5点と回答した人の割合は、全体の3%である6名であった。また、男女の割合は、男性0名（0%）、女性6名（100%）であった。

4. 自傷行為と死生観の関連

先行研究の尺度構成に従い、死に対する態度尺度（丹下ら、2013）の各項目の得点を合計した点数を各下位尺度とした。自傷行為が死に対する態度に及ぼす影響を検討するため、自傷行為の各群（自傷継続群、自傷経験群、未経験群）の死に対する態度尺度得点の平均値の比較を行った。死への態度の下位尺度得点の平均値および標準偏差を表3に示した。

初めに、死に対する恐怖尺度について1要因の分散分析を

行った。分散分析の結果、死に対する恐怖において自傷行為に有意差が見られた ($F(2,206) = 12.04, p < .01$)。そのため多重比較を行った結果、未経験群と自傷継続群の間 ($F(2,206) = 4.88, p < .01$)、自傷経験群と自傷継続群の間に有意差が見られた ($F(2,206) = 3.25, p < .01$)。

また、生を全うさせる意思尺度と死後の生活の存在への信念尺度において分析の結果、有意差が見られた（生を全うさせる意思尺度： $F(2,206) = 34.39, p < .01$ ）、死後の世界の存在への信念尺度： $F(2,206) = 7.80, p < .01$ ）。生を全うさせる意思尺度では、未経験群と自傷経験群 ($F(2,206) = 4.62, p < .01$)、未経験群と自傷継続群 ($F(2,206) = 7.56, p < .01$)、自傷経験群と自傷継続群 ($F(2,206) = 3.28, p < .01$) の全て間に有意差が見られた。死後の生活への存在への信念尺度においては、未経験群と自傷経験群 ($F(2,206) = 3.11, p < .01$)、未経験群と自傷継続群 ($F(2,206) = 2.93, p < .05$) の間に有意差が見られた。人生に対して死が持つ意味尺度、死の軽視尺度、身体と精神の死尺度においては群間に有意差は見られなかった。

5. 時間的展望と自傷行為との関連

石井（2013）の方法を踏襲し時間的展望と自傷行為との関連を検討するため、自傷行為の各群（自傷継続群、自傷経験群、未経験群）の時間的展望尺度の総得点及び各下位尺度得点の平均値の比較を行った。初めに、時間的展望尺度の総得点に対して1要因（自傷継続群、自傷経験群、未経験群）の分散分析を行った。自傷の各群における平均値を図1に示す。分散分析の結果、時間的展望における自傷行為には有意差が見られた ($F(2,206) = 3.42, p < .05$)。その為、多重比較を行ったところ未経験群と自傷経験群の間のみ有意差が見られた ($F(2,206) = 3.41, p < .05$)。続いて、時間的展望の各下位尺度得点に対して1要因（自傷継続群、自傷経験群、未経験群）の分散分析を

行った。その結果、過去受容における自傷行為には有意差が見られた ($F(2,206) = 6.76, p < .01$)。そのため、多重比較を行った結果、過去受容において自傷経験群と未経験群 ($F(2,206) = 3.13, p < .01$)、自傷継続群と未経験群の間に有意差が見られた ($F(2,206) = 2.41, p < .05$)。自傷の各群における平均値を図

2に示す。また、現在の充実に対する多重比較では、未経験群と自傷経験群の間に有意差が見られた ($F(2,206) = 2.55, p < .05$)。自傷の各群における平均値を図3に示した。一方で、希望、目的指向性においては群間に有意差が見られなかった(図4, 図5に示した)。

表3 各自傷群における時間的展望尺度の平均値及び標準偏差

	未経験群 (n=147)		自傷経験群 (n=39)		自傷継続群 (n=23)		主効果	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
目的指向性	2.75	0.08	2.74	0.16	2.91	0.21	0.29	
希望	3.27	0.08	2.92	0.16	2.82	0.20	3.64	未>経*
現在の充実	3.43	0.07	3.05	0.13	3.41	0.17	3.31	未>経*
過去受容	3.40	0.08	2.86	0.15	2.88	0.20	6.76	未>経**, 継*
時間的展望尺度	57.58	1.01	52.05	1.96	54.39	2.55	3.42	未>経*

** $p < .01$, * $p < .05$

※未：未経験群，経：自傷経験群，継：自傷継続群

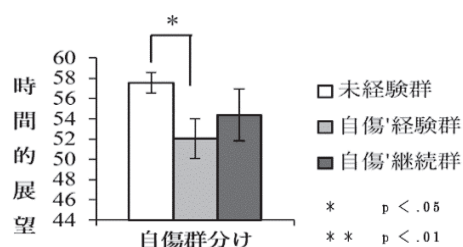


図1 3群ごとの時間的展望得点の平均値

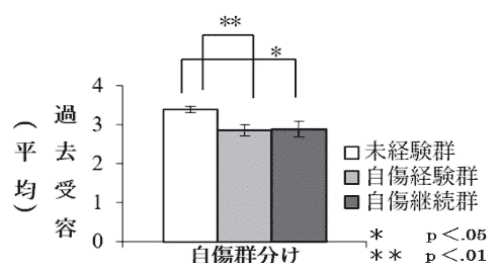


図2 3群ごとの過去の受容得点の平均値

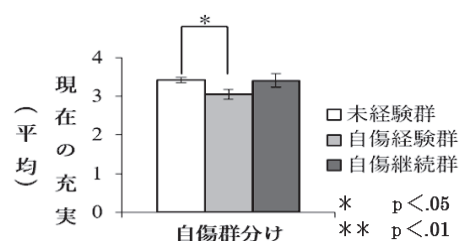


図3 3群ごとの現在の充実得点の平均値

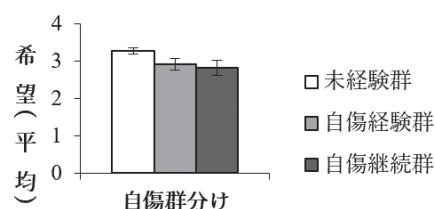


図4 3群ごとの希望の平均値

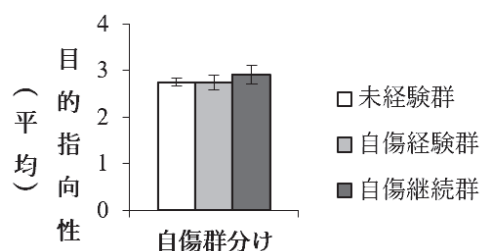


図5 3群ごとの目的指向性の平均値

Ⅳ 考察

1. 自傷行為に関して

仮説の検証に先立って、本研究の対象者について先行研究のカットオフ値を元に未経験群、自傷経験群、自傷継続群の3群に群分けを行った。自傷経験群となるカットオフ値の25点以上の割合は、全体の30% (62名) であり、男性8%, 女性20%であった。日本における自傷行為の実態について全国規模で調査を行った阿江ら (2012) の調査によると、全体の7.1% (男性

3.9%, 女性9.5%) が少なくとも1回以上の自傷を経験していると報告されている。また、本研究と同様に佐野 (2016) の質問紙を用いて大学生を対象に調査を行った大久保 (2022) によるとカットオフ値の25点以上の割合は、全体の34% (男性14%, 女性20%) であったと報告されている。本調査で得られた結果は同様の質問紙を用いた大久保 (2022) の報告と同程度の数値を示している。一方で、阿江ら (2012) の報告より全体の割合が高くなっていることがわかる。本研究では、既存の尺度に比

べ、侵襲性を低めるために9項目の尺度を使用したため、自傷行為に対する回答率が高まった可能性が考えられる。過去に自傷行為をしたことがあると回答した割合は女性の方が多かったが、男女別の「過去の自傷」比較では、有意差は見られなかった。同様に過去も現在も自傷をしていると回答した割合は、全体の3%であった。また、回答者は女性のみであった。大久保(2022)の調査では、女性の方が男性よりも有意に過去に自傷を経験したことがある人数が多かったと報告しており、本研究と異なる結果であった。本研究では、調査依頼を一つの大学で開講している心理学の講義履修者を対象としたこと、男性の被験者が女性と比べかなり少ないことの影響を考慮する必要がある。先行研究の中には男性の方が女性よりも自傷経験のある人数が多いと報告しているものや性差がないと報告している研究もある(井上, 2017; 関本・朝倉, 2017)。これらの先行研究(大久保, 2022; 井上, 2017; 関本・朝倉, 2017)から自傷行為の性差に関しては、自傷の種類や重症度、目的などの詳細の情報を含めてより検討する必要があると考えられる。加えて、本研究で、自傷行為の種類について調査を行わなかったために、回答者がどの程度の自傷行為を想定して回答したのかが不明である。自傷行為がどのようなものか回答者のイメージに委ねた場合、「リストカット」や「噛む」、「刺す」、「殴る」といったイメージが多くを占めると報告されている(大久保, 2020)。そのため、「髪の毛や体毛をぬく」、「皮膚やかさぶたをかきむしる」といった比較的意識の低い自傷行為が数値に含まれていない可能性が考えられる(井上, 2017)。また、重度の自傷行為と軽度の自傷行為について本研究では取り扱っていないため、自傷行為の種類による時間的展望と死への態度の関連については調査することが出来なかった。加えて、高校までの自傷行為に対する対応方法の研究は多く行われているが大学生を対象とした予防的アプローチの研究はあまり行われていないため、大学生への支援体制を考えていくことも望まれる。

2. 死に対する恐怖と自傷行為の関連

本研究では、自傷行為の有無による死への態度の違い及び時間的展望の違いを調査することを目的とした。自傷行為の有無による死への態度の違いとしては、自傷行為を現在も継続している者は未経験の者、又は経験したことがある者よりも死に対する恐怖が低いことが示された。そのため、仮説1は支持された。自殺念慮と死生観の関連を調査した興古田ら(1999)は、自殺について真剣に考えたことがある人は死を肯定的に捉える傾向にあり、死への抵抗感が有意に低いと報告している。また、大久保(2020)は自傷行為を経験している人が希死念慮を抱いている可能性が高いことを報告している。そのため、本研究で、対象とした自傷行為でも自殺念慮と同様の結果が得られたと考えられる。先行研究(興古田ら, 1999; 赤澤, 2009)では、自傷行為を経験したことがあると死への抵抗感が低く、死に対して親和的であると報告している。そのため、死への態度の下位尺度である死の軽視においても未経験群と継続群の間で差があると考えられたが、本研究では有意な差は見られなかった。同様に、人生に対して死が持つ意味、身体と精神の死においても有意な差が見られなかったことから、自傷行為の経験の有無と死の意味付けや身体としての生への執着への関連は示されなかった。自傷行為をしたことがある者は、宗教が死に対する考えに影響を与えると考えている一方で、死後の生まれ変わり(輪

廻転生)を信じてはいないと報告されている(興古田ら, 1999)。本研究では、対象者の宗教観については調査をしていないため自傷の有無と宗教の関連は示唆出来ないが、死の意味付けや身体としての生への執着は宗教観による影響がある可能性が考えられる。

3. 死への態度と自傷行為の関連

死への態度と自傷行為の関連において、自傷行為未経験群、経験群、継続群の間には死への態度の差異が見られた。生を全うさせる意思では、未経験群、自傷経験群、自傷継続群の順に生き続けたいという欲求が高いことが示された。自傷継続群が最も低い値を示したことは自傷行為を継続している場合、死に対する恐怖が低く、死に対して親和的であるという先行研究(興古田ら, 1999)と一致するため妥当であると考えられる。また、死後の生活の存在への信念では、自傷行為の未経験者は自傷行為を経験したことがある人より有意に死後の存在を信じることを示された。興古田ら(1999)の調査では、死後の世界や霊魂の存在、神仏の存在について自殺念慮が高い群は自殺念慮が低い群と比べて否定的であると報告しており、本研究の結果も同様のことを示していると考えられる。加えて、本研究では死の軽視では有意な差は見られなかった。このことから、自傷経験者は死に対して親和的や肯定的な態度を持つが、死を軽んじる態度を持つわけではないことが示された。同様に、人生に対して死が持つ意味、身体と精神の死においても有意な差が見られなかったことから、自傷行為の経験の有無と死の意味付けや身体としての生への執着への関連は示されなかった。

4. 時間的展望因子と自傷行為の関連

目的指向性及び希望と自傷行為の関連 自傷行為の有無による時間的展望の検討から、自傷行為を経験した者は未経験の者より時間的展望得点が低いことが示された。一方で、目的指向性、希望因子のどちらにおいても自傷行為の有無による差異は見られなかったため、仮説2は支持されなかった。これは、死について考えることが時間的態度に及ぼす影響を調査した石井(2013)の結果とは異なるものであった。石井(2013)では、死について考えることにより、将来への目的をもつことになることを報告している。しかし、本研究では自傷行為を扱っているため自傷行為者の全員が死について考えているとは言えず、石井(2013)の結果とは異なる結果が得られた可能性が考えられる。今井田ら(2021)は時間イメージと自己概念が自傷行為の体験頻度に及ぼす影響について、男女ともに未来へのイメージが自傷行為の体験頻度に対して直接的な影響はないと報告している。本研究で用いた目的指向性の内容は、将来に対して何かしらの目標や準備があるかどうかを尋ねており、未来へのイメージに繋がる内容であると考えられる。そのため、今井田ら(2021)の未来へのイメージが自傷の頻度に対して直接的な影響を持たないという報告は、自傷行為の有無による未来、目的指向性因子を見た本研究と同様の結果が得られていると考える。

過去受容因子と自傷行為の関連 過去受容因子では、自傷行為を経験した者、現在も継続している者共に未経験の者よりも得点が低いことが示された。経験した者と継続している者の間に差は見られなかったため、仮説3は一部のみ支持された。青年期における自傷行為と「居場所」の関連を調査した佐野(2015)は、自傷行為の要因として従来の家庭に虐待の状態や精神的孤独感等の家庭環境の要因に加えて、学校でのいじめ、あ

るいは問題児としての扱い等々といった学校環境要因も加わることで自傷行為が発生する可能性を指摘している。自傷経験者又は自傷継続者は過去の負の出来事が起因して自傷を行うと考えられることから、未経験者より過去受容が低いと考えられる。また、刃物による自傷行為に及んだことのある大学生、社会人を対象に当事者の語りを臨床心理学的に考察した長ら（2022）は、「自傷行為をしてよかったか？」という問いに対して研究協力者は「よかったと思う、後悔はしていない」と述べていると報告している。一方で、自傷行為は当時の自分が生き抜くための選択であり、ベストな選択ではなかったと認識しているとも報告している。本研究では、自傷経験群と自傷継続群の間に有意な差が見られなかった背景には、自傷を辞めた後も自傷行為を生きるための最善の方法と考える価値観が影響している可能性が考えられる。そのため、自傷の経験者に対する支援方法を検討していくことが望まれる。

現在の充実感と自傷行為の関連 時間的展望尺度の下位尺度である現在の充実感では、未経験群と自傷経験群の間でのみ有意な差が見られ、未経験群は自傷経験群より現在の充実感が高いことが示された。大学生を対象に自傷行為の体験者の語りから、行為の開始から帰結に至るまでの時間経過を調査した新井（2021）は、自傷行為の開始には「不安や緊張、苛立ち」といった不快感情が寄与しており、不快感情から衝動的に行った自傷行為を自傷行為者は後悔すると報告している。一方で自傷行為を行うと行為に集中してその後悔すら考えなくて済むようになるもと報告している。また、長ら（2022）の研究では、自傷行為に対して「自分が負けずに頑張っている証」と自傷行為を通して生きていることを実感するケースも示された。本研究で、現在の充実感において自傷継続群が未経験群と有意な差が見られなかった理由の一つとして自傷行為を通して現在抱えている不満やストレスを発散していることや自身の生を実感することで自身の現在に対して悲観的ではなくなった可能性が考えられる。

以上のことから、自傷行為を止めたことによって過去、現在、未来、特に未来に対する何かしらの感情の変化があった可能性が考えられる。しかし、本研究は横断的研究をおこなったため、自傷経験の有無と時間的展望、死への態度の関連に対して因果関係を示すことが出来なかった。自傷の発生から帰結まで縦断的な調査を行うことが出来なかったため、自傷行為を経験したことのある人の過去、現在、未来における死への態度の変化を見ることは出来なかった。伊藤（2014）は、自傷経験がある者はない者と比べて、自尊感情が低いことや衝動性が高いこと、自己像の不安定さを抱えていることを示唆している。自己像の不安定さへの介入として、今井・福井（2021）は、現在や未来に対する時間イメージを修正することが可能な介入により、自己概念を肯定的に変容できると提唱している。このことから、自傷行為を辞めた後でも自己像の不安定さから時間的展望を上手く持つことが出来ない可能性が考えられる自傷行為経験者では、自傷行為を改善することが出来た後も自傷を経験したことがある者が持つ現在や未来（希望）に対する時間的イメージの介入が必要であると考えられる。そこで、今後の展望としては、縦断的研究を通して自傷行為を継続していた時と自傷行為を辞めた後の変化について調査を行うことで自傷行為を停止するに至った要因及び、自傷行為経験者への支援方法についても

検討していくことが必要であると考ええる。加えて、時間的展望を扱う心理療法には、自分の過去、現在、未来を文章で記述し各内容を時間軸及び関連性に基づいて整理、構成していくことで時間的展望を高める「展望地図法」などがある（園田，2011）。自傷行為経験者を支援する際には、メンタルヘルスの改善への介入と共にこのような時間的展望の改善への介入が必要だと思われる。

〈付記〉

本研究の調査に参加いただいた調査協力者の方々に心より感謝いたします。また、研究にあたり様々なご助言をいただいた研究室の皆様へ感謝いたします。

文献

- 阿江竜介・中村好一・坪井聡・古城隆雄・吉田穂波・北村邦夫（2012）．わが国における自傷行為の実態2010年度全国調査データの解析．日本公衆衛生雑誌，59（9），665-674．
- 赤澤正人（2009）．若年者の自殺関連行動と死生観に関する研究日本死の臨床研究会 平成21年度研究助成報告書．
- 赤澤正人・松本俊彦（2011, September）．若年者における自傷行為と死生観との関連．In 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第75回大会（pp. 3AM0033AM003）．公益社団法人 日本心理学会．
- 新井素子（2021）．自傷行為の複数の過程：青年期にある大学生の語りの分析．発達心理学研究，32（3），124-133．
- Cohen, J. (1992). Quantitative methods in psychology: A power primer. Psychol. Bull., 112, 1155-1159.
- Elisabeth K. R (1998). 死ぬ瞬間（鈴木晶，訳）．読売新聞社（Elisabeth K, R (1969). On Death and Dying. New York: Macmillan Publishing.）
- 藤井美和（2003）．大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析．関西学院大学社会学部紀要，（95），145-155．
- 日潟淳子・齋藤誠一（2007）．青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連．発達心理学研究，18（2），109-119．
- 今井田貴裕・福井義一・甲南大学（2021）．[原著論文] 青年期において時間イメージと自己概念が自傷行為の体験頻度に及ぼす影響．東海学院大学紀要，15，41-54．
- 井上清子（2017）．大学生の自傷行為の経験と意識．生活科学研究，39，137-143．
- Joiner TE Jr, Van Orden KA, Witte TK, et al: The Interpersonal Theory of Suicide: Guidance for Working with Suicidal Clients. American Psychological Association, Washington DC, 2009（北村俊則〔監訳〕：自殺の対人関係理論：予防・治療の実践マニュアル．日本評論社，2011）
- 與古田孝夫・石津宏・秋坂真史・名嘉幸一・高倉実・宇座美代子・長濱直樹・勝綾子（1999）．大学生の自殺に関する意識と死生観との関連についての検討．民族衛生，65（2），81-91．
- 厚生労働省（2022）．令和4年版自殺対策白書．
- 金児曉嗣（1994）．大学生とその両親の死の不安と死観．人文研究大阪市立大学文学部紀要，46（10），1-28．
- 丸山久美子（2004）．死生観の心理学的考察．聖学院大学論叢，16（第2），189-218．
- 仲村照子（1994）．子どもの死の概念．発達心理学研究，5（1），61-71．
- 大久保貴弘・神澤創（2020）．大学生の希死念慮と自傷行為経験に関する調査．帝塚山大学心のケアセンター紀要，16，15-20．
- 関本富美子・朝倉隆司・養護教育分野（2017）．中学生における自傷行為の経験率，性差と心理社会的要因．東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系，69，183-191．
- 佐野和規（2017）．学校教育における自傷行為への心理的対応方法に関する研究（Doctoral dissertation）．
- 清水裕士（2016）．フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案．メディア・情報・コミュニケーション研究，1，59-73．
- 白井利明（1994）．時間的展望体験尺度の作成に関する研究．心理学研究，

- 65 (1), 54-60.
- Templer, D. I. 1970 The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology*, 82, 165-177.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討. *心理学研究*, 70 (4), 327-332.
- 長実智子・渡邊誠 (2022). 「私」にとっての自傷の意味：当事者たちによる「かたり」の臨床心理学的考察. *北海道大学大学院教育学研究院紀要*, 140, 259-308.
- 張賢徳 (2016). 自殺リスクの評価—ハイリスク者の発見と対応—. *心身医学*, 56 (8), 781-788.

Attitudes toward Death Associated and Temporal Perspective with Self-Injurious Behavior in College Students

Tomoki NISHIZAWA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

This study investigated the relationship between time perspective, attitudes toward death, and self-injurious behavior among college students in three groups: inexperienced, experienced, and continuing. Analysis of variance revealed that the inexperienced group had a more positive time perspective compared to the self-injured group. In addition, the inexperienced group exhibited greater hope, a subscale of time perspective, than the self-injured group, and demonstrated a higher acceptance of the past compared to the self-injured and continuing self-injury groups. Regarding attitudes toward death, the inexperienced and self-injury groups exhibited a stronger fear of death compared to the self-injury group. Additionally, the inexperienced, self-injury, and continuing self-injury groups, in that order, expressed a progressively stronger intention to live life to its fullest. Regarding belief in the existence of life after death, the inexperienced group showed a stronger belief in life after death compared to the other two groups. These findings indicate that temporal perspectives and attitudes toward death vary depending on an individual's self-injurious behavior.

Keywords: self-injury, temporal perspective, attitude toward death